

第4回

新宿区次世代育成協議会

平成22年3月29日(月)

新宿区子ども家庭部子ども家庭課

午前 10 時 00 分開会

会長

皆さんの意見をこれまでずっといただいた新宿区次世代育成支援計画、この計画は22年度から26年の5カ年間で計画期間とする計画の策定が終了し、本日の協議会で御報告できることになった。

昨年度、計画を策定するための実態調査を実施するに当たり、調査項目の設定から素案についての協議まで、協議会の皆様には本当に活発かつ有意義な議論をいただいたことを心から感謝申し上げます。

この計画は、新宿区が前回の計画を初めて策定し、それを引き継いだ今後5カ年間の子どもたちの自立をどのように社会全体で、新宿という地域全体の多くの力としながらつなげていくかというよりどころになる計画である。この計画に基づき、新宿区がより一層子育てしやすい町となるよう努めてまいりたい。

本計画の中に、新宿区の次世代育成支援を着実に推進していくためにという項目が設けられている。この一つの柱に本協議会の円滑な運営がある。この協議会で計画の進捗状況を把握し、また検証を行いながら、新宿区の実態に即した課題を的確にとらえ、皆さんとともに新宿の町が、子どもたちの発達時期に見合った力を備え、町の担い手として自立していく子どもたちへの支援に取り組んでいきたいと思う。

事務局

【配布資料】

- ・ 次第
- ・ 「新宿区次世代育成支援計画」（平成22年度～平成26年度）の策定及び素案に対するパブリック・コメントの結果について
- ・ 素案からの主な変更点について
- ・ 「新宿区次世代育成支援計画」（平成22年度～平成26年度）の策定及び素案に対するパブリック・コメントの意見及び区の考え方
- ・ 「新宿区次世代育成支援計画」（平成22年度～平成26年度）
- ・ 「新宿区次世代育成支援計画」（平成22年度～平成26年度）概要版
- ・ 虐待防止リーフレット「みんなで子育て応援しよう～子どもの虐待を防ぐために～」
- ・ 子ども向けカード「いっしょにかんがえよう」
- ・ 少年非行の背景を考える（シンポジウムチラシ）

それでは、議事に入らせていただく。ここからは、次第に掲げた議題について、会長が進めていく。

会長

新宿区次世代育成支援計画の策定及び素案に対するパブリック・コメントの結果について、事務局から説明をお願いします。

事務局

まず、資料1だが、冒頭の部分は計画のこれまでの概要が書かれている。3ページのところをごらんいただきたい。11月12日から12月14日までパブリック・コメントを実施させていただき、4ページに結果が書いてあるが、冊子の表紙をご覧くださいと、見やすくなっている。

パブリック・コメントでいただいた意見は全部で70件、提出者は25人と1団体であった。提出方法は記載のとおりである。いただいた意見の反映状況だが、意見を計画に反映したものが3点、意見の趣旨は計画に取り込んでいるのが8点、また計画の趣旨に沿って今後取り組むものが14件、今後の取り組みの参考とさせていただくのが28件、意見として伺うのが17件で、以降のページについては意見の要旨と区の考え方について記載をしている。これは区民の方に計画とともに回答させていただく。

次の資料2が素案から変更したものについて、左側から章と素案のページ、本計画のページが違っているため、その対比。次の欄が修正理由と素案の内容、修正後の本計画の内容になっている。

大きな変更はなかった。考え方を少しわかりやすく盛り込んだほうがいい、文言の修正、いただいた意見以外にも気がついた点を修正した。また素案の時には22年度からの新規事業が確定していなかったため、確定したものを盛り込む修正をした。

全体として、計画本編のほうで御説明させていただく。

最初区長のあいさつがあり、目次。1ページ目が目的で、総合ビジョンは『子育てコミュニティタウン新宿』ということで、子育てを通して新しいコミュニティがつけられ、人と人がつながって子育てしやすい町になることを、この計画の主眼としている。そして4つのビジョンが支えているという形である。

続いて2ページ目、計画の位置づけと計画期間で、ここで変更がある。説明の、「なお、この計画は」のところ、これは行政計画の位置づけであるが、この計画は次世代育成支援計画であるとともに、児童福祉法に基づく市町村の保育計画、母子及び寡婦福祉法に基づくひ

とり親の自立支援に関する計画、国が示した母子保健や国民の健康に関する母子保健計画を包含することを明記している。

続いて3ページは、17年度から21年度の次世代育成計画の実績を書かせていただいた。

4ページからが子どもと家庭をとりまく状況と課題で、統計資料や調査による結果等で新宿の現状を把握できるつくりとしており、地域に求められる子育て支援の取り組み、子育てをつらいと思っている方々がどのくらいいらっしゃるか、保育園の待機児童の状況などを、記載させていただいている。

15ページ目からが地域別の状況で、10特別出張所ごとの現状や子育て支援の状況、地域の特徴をまとめた。

20ページ、21ページは、新宿区の子育て支援施設を地図に落とし込んだものである。

22ページからは、統計や調査等から見た現状、そこから導き出される子育て支援にかかわる新宿区の主な課題と方向をまとめたものである。

25ページ目からが基本目標で、「この計画では、「子育てしやすいまち」を実現することにより、新宿区で子どもを生み育てたい人が増えていくことを目指します」ということを掲げた。中段に、26年度までの数値目標として、子育てしやすい町だと思ふ人の割合を45%まで増やしていくことを掲げた。

15年度の調査では、子育てしやすい町と思ふ方が、思わない方より少なかった。今回の調査では子育てしやすい町と思ふ方のほうが格段に増えた。この5年間で新宿区は変わってきたが、さらに上を目指していく目標を立てたものである。

26ページからが施策目標で、4つの基本的な視点を置き、5つの目標を掲げている。新宿区では、まず子どもに対する支援を目標1に持ってきた。それから目標2は、母子保健計画を包含していると申し上げたが、健やかな子育てを応援するという目標で、母子保健についての内容になっている。目標3が、きめこまやかなサービスですべての子育てをサポートする。目標4が、地域や環境の側面にスポットを当てている。目標5が、ワーク・ライフ・バランスが実現できる環境づくりを推進するである。

28ページからが、素案にはなかったものであるが、縦軸に目標をとり、横軸に年齢をとって、ライフステージを見通した次世代育成支援ということで、目標ごとにどのような施策・事業があるかを図示している。これが30ページまでである。

続いて、現状の課題、取り組みの方向ということで本論に入っていく。変わったところでは49ページをご覧いただきたい。

主な事業で、幼児食教室が22年度新規事業で始まる。1歳児を対象に、離乳完了から幼児食への移行期の食事についての講和と調理を行う。

51ページ一番下の妊婦歯科相談、54ページの子どもに関する医療情報の提供、これが22年度新規事業で加わる。

61ページ、これも主な事業で下から2番目、子育て支援コーディネート体制の充実として、相談や調整は非常に充実してきているが、専門性を持った職員によるトータルコーディネートが必要である。職員のコーディネート能力の向上を図るため、研修を充実させていくものである。

62ページ、素案にはなかったが、トピックとして3つ記事を挙げている。その1番目で、「新宿ここ・から広場」を知っていますか?という題名で、東戸山中学校跡地を活用した、子ども、障害者、高齢者の施設が一体となった場所を整備している。23年度4月にオープンする予定だが、「新宿ここ・から広場」という名称を皆様からの公募で決めた。その中の一番左側の建物が(仮称)子ども総合センターで、子ども家庭支援センター、障害児のタイムケア事業、学童クラブ、児童館等が入る建物で、総合的な子育て支援の中核を担う施設となっていく予定である。その隣の建物が仕事センター、その右側の建物が小規模特養ホームになる。それから真ん中がグラウンドで、主に平日は子どもの運動ができる場所、そのほか多目的に使える広場として整備し、右側の四角い所が、畑や田んぼを整備して農業体験などもできる。

64ページ、国のほうで子ども手当という名称で所得制限のない手当を創設したので、これまで新宿区児童手当としてゼロ歳から中学生までのお子さんの手当を確保していたが、事業名を置き換えたものである。

また、児童扶養手当も、これまで母子家庭のみの支援であったが、父子家庭にも8月から拡大される予定である。それに伴い、新宿区ではこれに先駆け、この1月から新宿区父子家庭手当という児童手当を創設していた。国がスタートするので、そちらに充填することを書かせていただいている。

また、高校の授業料の無償化も議論されているが、区は直接事業に関与しないため記載していないが、63ページの現状と課題の5行目あたりに高校の授業料の無償化や子育て家庭への新たな手当について議論されていることを触れさせていただいた。

続いて、66ページの取り組みの方向の一番下、大規模開発等における保育施設設置の協力要請は、事業者が一定規模以上の住宅設置を伴う大規模開発があった場合、区が保育施設の

スペース確保を必要に応じて協力要請する。これは素案にも載っていたが、4月から具体的に実施するに当たり、要綱等を整備した関係で、文言整理をしている。

80ページ、これも新規事業だが、一番下、保育園児等への日本語サポートでは、新宿区は外国から来たお子さんも多く、幼稚園では既に日本語がまだ十分でないお子さんへのサポート事業があったが、保育園でも新たに実施する。

84ページをご覧いただきたい。トピックの2つ目で、第二期新宿区次世代育成協議会の提言「子どもの虐待防止と地域の役割」について、御紹介している。これは前期の協議会で部会を設け、皆様に御議論いただいた内容である。

本論では、81ページ、82ページ。子育て支援施策全体で支える子どもの虐待防止で、妊産婦からの支援が必要、地域での虐待に至る前の支援が重要であるという内容で反映させていただいた。

この内容は広範囲にわたるので、このページだけではなく、計画の色々な所にエッセンスが入っている。

89ページ、新規事業で、子どもを連れた人に配慮した取り組みを区役所だけではなく、区の商店会や飲食店などと協力してやっていく、まちの子育てバリアフリーの推進事業をスタートさせる。

102ページがトピックの3つ目で、国が19年12月に「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」策定した。本論でワーク・ライフ・バランスの重要性等を述べているので、その基礎として御紹介させていただいた。

108ページからが資料編で、本論の主な事業では幾つかの事業しかピックアップさせていただけなかったが、こちらから先で次世代育成にかかわる全ての事業を網羅させていただいた。色が着いているものが主な事業で、それ以外のものもあるということで御紹介している。

136ページが計画の策定体制で、137ページがスケジュール、地域説明会の実施状況になる。

141ページが協議会の構成メンバーお名前を記載させていただいている。その次からは庁内の体制を載せている。

以上が本計画の全体像であり、これは各施設でご覧いただけるほかは有償頒布したいと思う。また、概要版は無償で、色々な所を通じて配布し、手に取っていただけるようにまとめている。計画の中から目標や、ライフステージを見通した次世代育成支援として全体が見渡せる部分、子育て支援のマップを載せている。

以上がこの計画の説明である。

会長

計画内容について説明がなされたが、委員の皆様から御質問等があればお願いしたい。質問される方は挙手をお願いしたい。

特にないようであれば次第の先に進んで、最後の意見交換の時に戻っていただいても構わないので、よろしくをお願いしたい。

次に4、虐待防止リーフレット及び子ども向けカードについて、事務局から説明する。

事務局

今、様々な所で子どもの虐待に関する痛ましい報道等がある。区ではこのような事件は絶対に起こしたくないと思っている。区では子ども家庭支援センターを中心に色々な活動をしているが、地域の方々にも御理解を深めていただくとともに、子ども自身にも何かあったらSOSを出してもらいたく、このリーフレットと子ども向けカードを作成した。

カードは区立小学校の全児童及び生徒に対して学校を通じて配布をする。リーフレットは区内の各施設に配布していく予定である。このリーフレットには子ども家庭支援センターの御紹介や、虐待に関する理解を深めていただく内容も取り込んでいる。また、裏を見ていただくと、第二期次世代育成協議会による提言、子どもの虐待防止と地域の役割を参考にした文章も盛り込んでいる。虐待の早期発見、早期対応とともに、未然に子どもの虐待を防ぐために何ができるかというメッセージをまとめたものである。

会長

このリーフレット並びにカード等について、御質問等があればお願いしたい。

こういったものは、現実にかかわっている人たちの所にどう届いて機能するかが、本当に大切なところである。皆様のところで御活用いただけるようであれば、御連絡をいただけたらと思う。どうぞよろしくをお願いしたい。

委員

今、「ひとりでなやまないで 子ども家庭支援センター」を見て瞬間的に思ったのだが、色々な事が起こるのは夜が多いと思うが、これを見ると5時までの電話の受付時間である。できたら東京都だけでも24時間とか、夜に対応できるものを何かつくっていただきたい。昼の人が動いているときだけの対応というのは役所的で、対応ができにくいのではないかと思う。何かいい方法を考えていただきたいと思う。

事務局

東京都の児童相談センターも一応24時間体制で、人は居る。直接そこに掛けるのではなく、

一番下の児童相談所全国共通ダイヤルというところをご覧いただきたいが、ここが24時間対応になっている。これは全国の共通の番号で、近くの児童相談所に電話がつながる仕組みである。特に東京都の児童相談センターだけを御紹介するのではなく、24時間対応のほうを御紹介させていただいている。申しわけないが、新宿区は昼間の対応になっている。あとは、警察の方には御苦勞をかけていると思うが、夜の場合には警察に通報が行っているのが現状かと思っている。

委員

できたらこれにも24時間対応ができるように、何らかの方法で印刷しておくほうがいいのではないか。

会長

確かに5時までの対応だと、子どもが声を上げたいと思った時でないところもあるので、御意見いただいたことは十分受けとめさせていただき、今回はこれで配らせていただく。また別途つくり直しをする時、もしくは新たなものについては、そのようなことを十分対応していきたいと思う。

委員

本体28ページのライフステージを見通した次世代育成支援というところで、ゼロ歳から予定されていて、一番上のところに、学校における人権教育の推進がある。あと108ページのほうにも、子どものための人権擁護委員の活動という欄に小・中学校と記載されている。確かに小・中学校にカードを配布したり、事務局から御相談いただいたようなリーフレットも出ているが、人権教育の原点というのは、ゼロ歳とは申し上げないが、もしかすると小学生からでは遅過ぎないのかという気がする。幼児教育あるいは保育園教育の段階で、できれば保護者を含めたPRや教育が、1年の中で何回かなされるような仕組みが必要ではないかと。小学生ぐらいになると、割ともうお利口さんになってくるので、そこでうわべだけの、いじめはいけないとか言葉だけで申し上げるよりは、成長の段階で教え込むことが必要なのではないかと感じている。

事務局

ここに、学校における人権教育ということで、事業名としては学校の部分だけになっているが、具体的には幼稚園の教育要領や保育所の指針の中に、相手を思いやる気持などを育むことは既にされていると思う。人権教育という謳い方はしていないが、既に幼児教育段階からきちんと目配りされていると考えている。

委員

今のことだが、保護者への対応も含め、今事務局がおっしゃったように、保育所保育指針にももちろん含まれている。それから第三者評価等の評価項目の中にも、そうした項目がある。

ただし、今おっしゃったように、保護者の方たち全体がそのことを認識できるような対応を、就学前全体にわたって、何か具体化していくことの必要性は感じる。

会長

このライフステージを見通した次世代育成支援で、こういった事業がライフステージにあるかというのを書いてしまうと、今、疑問を持たれたような形での見え方になってしまうということを実感した。おっしゃるように、人権教育は本当に子どもが生まれた時から、何かその辺が表現できないものだなと思ったが、今の御意見については、表現についても今度、色々な所でわかりやすくしていくことがベースのものとして大事だと受けとめさせていただく。

委員

110ページの学校評価の充実だが、学校評議員の発言力がもうちょっと強いといいのかなと思う。PTA活動も、本来であれば校長と同じ権限を持つはずだが、実際にはお手伝い団体というきらいがある。きちんとした形で学校に物を申せるような評議員とかPTAという組織であって欲しいのだが、その辺の教育現場に関する提言がちょっと少ないかなというきらいがある。その辺の今後の方針についてお聞かせいただければと思う。

教育長

学校の経営について関係者の方から御意見を伺っていく、また連携していく仕組みで、PTAというのは長い歴史を持っている。PTAについては保護者の方と学校の教職員も参加しており社会教育団体という位置づけになっている。その他に、今、委員のほうからお話が合ったように、学校評議員の制度もある。さらに新宿区では平成22年度から、全国的な名称ではコミュニティスクールと言われているが、第1号として四谷中学校を指定する。新宿では地域協働学校の名称で運営していくが、学校運営協議会を持つ学校を指定していく。ここにはPTAの方も入っていただき、学校評議員の制度を取り込むような形で、より学校の運営に参画していただき、協働して学校をよくしていく、子どもたちのために学校をよくしていくという形で動いていく。

そういう中で、今、学校評議員の制度、あるいは学校評価の進め方をさらによりよく実効

性のあるものに高めていく、一つのモデル的な取り組みになっていくと思っている。さらに、この数を順次増やしていきたいと思っている。さらに学校評価という意味では、第三者評価についても22年度から発足させる。こういった取り組みを進めながら、今お話があったような部分、形式に流れず効果的なものになっていくように教育委員会としても取り組んでまいりたい。

会長

確かに次世代育成支援計画が、私たちは子どもが自立するまでということで、学校というステージを非常に大切なものと考えていながら、これまでどちらかといえば乳幼児期の課題が非常に多かったので、こちらのほうに施策の重点が置かれてきた。子どもが自立するまでというのはもう少し幅広くとらえようということで、このライフステージに合わせた。今教育長からお話ししたように、非常に学校という場が地域にとっても大切な場であり、子どもの成長発達に大きな役割を果たしているということで、御意見をいただいたところを、この協議会としても受けとめてまいりたいと思う。

それでは、その他ということで、意見・情報交換をぜひ時間まで進めてまいりたいと思う。

私のほうとしてはぜひ学識経験者委員の先生方からも少し時間をとって、ライフステージを通じた、全体を通じた視点からの次世代育成支援を考えると、お話もいただきたい。

先生方には15分ぐらいお話をいただく時間を持ちたいと思う。もし特に今御発言がないようであれば、先生方に少し先にお話をいただき、それを含めて皆さんから御意見をいただき、次の年度に向けていけたらと思うが、よろしいか。

それでは、まず初めに、副会長から願います。

副会長

本当に部会の皆さんには何回にもわたって熱心に御議論いただき、改めて副会長としてこの場でお礼を申し上げたいと思う。どうもありがとう。

私の専門は心理学、しかも発達を専門に、特に青年期を中心に研究してきた。その中で、発達というのは、生まれてから大人になるまでが従来の発達の対象で、これはどうも狭い発達の概念ではなかろうかと、ここに至り、人間は生涯にわたって発達し続けるのだと。だから赤ちゃんも、幼児も、児童も、そして青年も、さらには中年も、そして老人も発達途上にあるのだと。発達というのは自分の内にあるいろいろな資質が表にあらわれる、これがデベロップの語源にもなっているわけで、デベロップは内に秘められたものが開発されるという意味がある。そういう観点から次世代の問題を少し考えてみたいと思っている。

ここにライフステージということで、青年期以降の段階として世帯形成期まで広げて提言がなされている。これはとても素晴らしいこと。これをもっと拡大できないだろうか。老年期まで拡大されるという発想もあっていいのではないかと。私たち大人というのは、子どものためを思って、子どものために何かしてやろうと考える。これは大変素晴らしいことではあるが、それがひるがえって、結局は自分のためなんだと。自分の発達にも帰するんだという視点で、子どもの発達支援を考えることができないだろうか。

具体的にどういう形でこういう施策に結びつくかについて、私はまだ具体化していないが、何かできないだろうかと見てみると、机上に配付されている「みんなで子育て応援しよう」という、虐待の問題のこの中に、おじいちゃんおばあちゃんまでイラストが描かれている。これはとても大事な視点ではなかろうかと。子育てというのは、実際に子育てをしているお父さんお母さんだけではなく、それを取り巻いている地域もあれば、さらには家族といえは祖父母の世代も重要な役割を持っている。それは子どもにとって、重要な意味を持つ。と同時に、実は老人だって子育てのかかわりを通して、自分も啓発される部分があるという視点が、何か施策の中に盛り込んで展開できると、素晴らしい区だなと。

だから、新宿区というのは、キャッチフレーズ的に言えば、しなやかに、そしてしたたかに、そして安心し、充実した老後が過ごせる町という老後の施策も可能ではなかろうか。だから、次世代育成は次の世代が育っていくということでもあるが、その自治体のかかわり、施策を通して、老人だって得るものがあるのではなかろうか。そういう観点で新宿区に期待したいのは、「新宿区ここ・から広場」である。ここには本当に小さな子どもと特養ホームが入るということで、子どもが老人たちと同じ敷地の中で過ごせる。そこを隔絶してしまわないで、子どもたちに対して特養にいる老人世代が十分に参加できる部分というのはあるだろうと。これを通して、実は老人たちもすごく成長、発達し続けることが可能だろうと思う。

私事だが、この春休みに実は一番上の孫が私の家に泊りがけで来て、2人でドラクエというゲームをとことん楽しんだ経験がある。私ものめり込んでしまって、一緒にゲームをする。そのことが子どもにとって、物すごく刺激になる。こちらが何か遊んでやっているというそぶりを見せているうちは、まだある限界なのだと。こちらが夢中になって一緒になって競い合う状況に変わった途端、子どもの態度ががらっと変わる。

新宿区は色々な意味で充実した青少年に対する、協議会や地域の活動がある。それをもう少し進めて、子どものために何かしてあげる発想から、そこを通して自分たちもしたたかに充実しているという意識が生まれるような活動、そういう施策が何か生まれてくるといいな

と考えている。それは大げさに言うと生涯発達という、特にスポーツの世界では今、生涯スポーツということも言われている。一生を通して、高齢化した社会の中で、老人だって、これから伸びる部分はある、そういう姿を青少年に示すということ自身、すばらしい青少年あるいは次世代に対する育成のエネルギーというか、糧になると思う。

そういう意味で、次世代育成というのは決して青年期まで、さらには子育て期までではなくて、さらにその先にまで広げ、発展し得るような視点が新宿区でつくられればいいなど。新宿区は子育てについては非常に評価が高い区である。具体案はまだ持ち合わせていないが、その子育てを通して、老後も安心できるまちづくりができると何かうまくいくのかなと思った。

委員

副会長が生涯発達の観点からということで話され、私も基本的にはそのことをお話し申し上げたいと思っていた。もう私が説明するまでもなく、今の日本の人口の動きを見ると、本当に人口全体がかなり減少し、中でも子どもの占める割合が大変少なくなっている。こどもの日には新聞報道で15歳未満の推計人口が毎年報道されますけれども、総人口に占める割合がもう13.4%。1950年には35.4%だった。一方では、65歳以上の人口の割合がもう間もなく4分の1に行くのではないかと。これはもう大きな変化を期待することは難しい。しかし、こういう厳しい状況にあるということを再認識しておくことが必要だと思う。

そんなにも少ない子どもでも、会長さんからも副会長からもお話が出たように、児童虐待が増え続けている。しかも死に至るような深刻な事例が引き続き起きている中で、明らかに虐待だとわかる、そういう子どもに「どうしたか」と聞くと、決して親がやったということ子どもは言わない。転んでしまったの、ぶつかってしまったのというように、子どもにとっては最も信頼する、頼らなければならない親に対して、親を思いやる、気遣う。こういう子どもの心の内を理解しながら、この次世代育成支援を考えなくてはいけないと思う。

今回、事務局の説明にもあったが、世帯、家庭を形成するところまでライフステージのことを考えながら、この次世代育成支援の行動計画ができたことは大変すばらしいと思う。私もこれを拝見しながら、副会長がおっしゃったことと同じようなことを思っていた。世代を育成する、その後の老年期に至るまでを、あのラインのところに加えてみることも必要かと思った。

鯨岡峻先生という方がいらっしゃる。鯨岡峻先生がもう大分前から、「育てられる者」から「育てる者」へ、育てられる者である子どもが、やがて育てる者へと変わっていく。この

考え方が重要であると思います。「育てられる者」から「育てる者」へという、人間の営みとしては当たり前と考えられていたことが、実は当たり前にはでき得ない。赤ちゃんとして生まれて成人するまでではなく、その人が一生涯を終えるところまで、その中でお互いに育ち合い、影響を受け合いながら、人としての価値を次の世代へとつなげていくことが大事だと思う。

残念ながら、今はマイナスの連鎖、例えば虐待を受けて育った人が、自分が育てる立場になった時に再び虐待をしてしまうマイナスの連鎖が起きている。私は、新宿区の大きな特徴として、この計画を策定していく段階で、区民が一体となって行う、区民一人一人の持つ力を生かしていくという姿勢が、一貫してあったと思う。そういう中で、プラスの連鎖をぜひつくっていくことが大事だと思う。

世界的な動きを見たときにも、OECDがスタートストロングということで、人生の始まりこそ力強くと言っている。人生のスタートのところにしっかりとお金もかけ、人手もかけ、育ちの基本を国を挙げて行うことが社会全体の力を強めていくことになる。このスタートストロングの中で、我が国の子どもにける国のお金のかけ方が、そうしたヨーロッパ諸国に比べると3分の1というか、かなり低い段階であると思う。もちろんこれは国の色々な税制の問題であるとか、様々な要素があり、数字だけで語ることはできないと思うが、子どもが育つところにもっと社会全体が目を向け、具体的な取り組みをしなければいけないと思う。

そのOECDでも言っているが、子どもの育ちの中で異質な集団の中で育つこと、色々な人が存在する中で互に影響をし合って育っていくことが、大事だと思う。

これも鯨岡先生の本の中から、障害の子どもの保育をしている保育士の文章を御紹介したいと思う、「冬の晴れ間の1日で、冷たい外気にもかかわらず太陽が雲間から顔を出していました。もえちゃん（全盲）は、保育士に手を引かれて、裸足で園庭に出てくると、足の裏で冷たい地面の感触を確かめるかのように歩き始めました。そして、建物の陰になっている所と、日が当たっている所の境目に来ると、そこで歩みを止めて、影の部分と日の当たる部分の暖かさの違いを足の裏で確かめています。保育士は、そうね、こっちは冷たいね、そっちはあったかいね。ふーん、もえちゃんはそんなことわかるんだ、と独り言を言うように感心していました。」

こうした子どもと日常的にかかわることによって、子どもも、そして大人も気づかせてもらっている。異質な集団でということを見ると、新宿区は外国人の方や、様々な人が集う場で、会長さんはリスクもあるとおっしゃったが、逆に考えれば、多様な人とかわるチャ

ンスがある。それを子どもの育ちにとって、あるいは大人も含めて、プラスになるような方向性が大事ではないかと思う。

それからもう一つ、生涯学習の基盤として大事なことが、異質な交流に加えて、自立的に活動すること。先ほど人権の問題が出ましたが小さな子どもであっても、かけがえのない大切な存在として尊重していく。こういうことがとても大事であろうかと思う。

子どもたちに答えを教えるのではなくて、子どもたちと一緒に答えを探していく。子どもとともにということが、今回の施策の中にも生かされていると思うが、この姿勢はとても重要なことだと思う。

今後の課題としては、先ほどのライフステージで施策が示されているが、それぞれのステージをつなげていくことが非常に重要である。その時期その時期の充実した内容は、この施策の中に示されていると思う。しかし、次のステップに行く時のステップアップの段階でもうまくいくような、行政もそうだし、事業を実施している学校や施設、そこにかかわる人が、もう少し連携をよくしながら、システムをつくっていく必要がある。そのためにも、会長さんが最初におっしゃった、立派にできた施策がどう転じていくのか一緒に見詰め、考え、そのシステムをより強化していくことがとても大事なことではないかと思う。

私もここにかかわらせていただき、実に皆様方が積極的に、身をもって新宿区での次世代育成をどうするかを考え合う場であったと思う。たくさんのことを学ばせていただいた。ありがとうございます。

会長

ありがとうございます。それでは、あとは三、四十分程度、皆さんのほうから、先生から御意見をいただいたところも含め、互いの情報交換、互いに心をつなげる意味でも、問題提起をしていただけたらと思う。何かあったら手を挙げていただきたい。

委員

有意義な会に参加させていただけたと思っている。いろいろなことを体験させていただいている中で、自分の中に一つテーマが決まってきた。達成感を求めるという部分で今後活動したいと思っている。

この達成感とは何かというと、子どもたちの中でも達成感があるから何かができる、次が生まれる。大人の中にもそれがある。高校生の中にもそれがあるという共通のワードかなと感じている。例えば育成会のキャンプの中でも、子どもたちがキャンプ先で何をするか自分たちで決める。それが私たち大人にとってみると「ドッジボール？」とか「しっぽ取り？」

というようなものでも、それが一番楽しかったアンケートの結果が出てくる。それから四谷ひろばでは、子どもたちの企画の中で出てきた雑巾がけレース。講堂の端から端まで、掃除もできるし一石二鳥ということでやったが、体の不自由なお子さんも参加されて、一生懸命雑巾を押している。普通の子は行って帰ってくるのに18秒、20秒という記録を出している中で、1分、2分、3分かかって、反対側に届くのも大変そうなので、見ている私としては半分でもいいよと、向こうへ手をつくだけでいいよとってしまった部分がすごく恥ずかしくなるくらいに子どもたちは頑張っていた。当事者は最後まで往復して帰ってきて、また今年も絶対出たいと。今年は企画から参加したいということで、四谷ひろばの2周年には体の不自由な子たちのアイデアも盛り込んでいきたいと思っている。

自分は、高校の文化祭実行委員会で、責任を持って何かをなし遂げることを、楽しみながら体験できた一つのステップアップだった。四谷ひろばの中でも、文化祭実行委員会的なことと子どもたちに楽しい体験をしてもらいたい。大人の中でも同じかなと思っている。また四谷は今、子育て支援センター、二葉さんの御尽力があって、乳幼児の集まりがとても連携が図れている。児童館、幼稚園、子育て支援センター、それから四谷ひろば、プレイパーク、皆さんの力の中で年に2回集まりがあって、9月にまた催し物をしていきたいという話が出ている。連携を図る中で、先ほどお話があった地域協働学校の四谷中学校を中心に、今年かなり変わるであろう部分に大変期待をしていて、その中に入って活動できればと願っている。

本当に小さいおさんは、お母さんが笑ってくれることに向けて、泣いてお母さんと呼んだり、はいはいをしてお母さんのところにたどり着く、というのも一つの達成感から来るものだろうと思っている。色々な世代で達成感が求められる、味わえる関係ができていくといいと思っている。

区民会議の中から、ずっと会長さんのほうから、行政は何ができて、地域の人たちは何ができるか、という視点で取り組んでこられたところに、感動している。お互いで歩み寄りなければ達成できないことが、感じられる会議に参加させていただいてよかったと思っている。また今後ともよろしく願いしたい。

委員

私は、この場では区民委員という個人の立場だが、ホームスタートジャパンという家庭訪問型の子育て支援の活動をしている。

先生の話聞いていて、ひらめいた言葉が2つある。まず私どもの活動の特徴とすごく響くところは、1つは自主性とか自発性の尊重ということと。それから多様性の尊重という2

つがある。

1つ目の自発性と自立性の尊重は、何か支えなければいけないというのはあるが、支援をするときに、基本的に御本人が何を必要とされているか、なりたい目標設定みたいなところを大切にしながら、寄り添っていく活動をしたいということと同じだと思った。

多様性は、1つはサポートする側の家族の多様性で、訪問する家は、多胎児のお家もあれば、外国から嫁いできた、引っ越してきた親御さんもあれば、障害児を持つ親御さんもいたり、訪問している御家庭の形態も本当に色々で、必要とされているものも色々。そういったものに対応できる普遍的な仕組みがあると、多様性をうまくカバーできる可能性があるということも、活動を進めるにあたって感じている。

あともう1つは、支援をする側の多様性も、今見えてきている。一つは年齢層である。子育て当事者の若いボランティアの方もいれば、もう孫が大きくなってしまっという御高齢の方もいる。今は女性の方が多いが、父子家庭にはお父さんの経験者も行きますみたいな形で、女性だけじゃなくて男性の方もボランティアで協力していただければいいとか、訪問ボランティアはできないんだけど、実は職務経験で自分は会計に精通しているとか、実は僕は広報だとか、こういうイベントの企画ならできるとか、色々な力を持った人が参画できる受け皿が組織づくりの中の大切なところで、支援をする側もされる側も、多様な人を包括できる仕組みがあると、うまく生かせると思う。この自発性と多様性を大事にしたいと思い、改めて新宿の現状を勉強させていただく中で、その2つの大切さを痛感した次第である。

会長

なるべく多くの皆さんに今年度最後ということで御意見いただけたらと思うが。

委員

私は、平成17年だったか18年ごろにあった区立幼稚園を考える検討委員会、そのような名前のビジョンに参加しており、そこからこの次世代育成協議会にも続けて参加させていただいている。

その当時、区立幼稚園を考える検討委員会では、教育委員会の部長さんを初めとして、新宿区が考える教育は、区立幼稚園が幼児を育てるという考え方が主になっていた。私立幼稚園側として参加させていただいていたが、そこには区立幼稚園の保護者の方も来ていて、お互いの目がつり上がるような意見の交換もしていた。今日配付の資料のパブリック・コメントの意見の及び区の考え方の5ページの25番に、四谷地域は年少児の受け入れも多くしてほしいという御要望があって、その中で区の考え方が、私立幼稚園もあいているので、そちら

も検討してくれという文言が入ったのはすごく画期的である。教育委員会が私立幼稚園も本当に考えてくれるようになったと思って、ありがたいと思っている。

会長

私立幼稚園も、ともに大切な新宿の町の子どもを育てる私たちの資源、宝であるということとはみんなが認識をしているところであると思う。

ほかにいかがか。なるべく多くの皆さんに御意見を。

委員

2点ほどあって、まず1つ目だが、地域子育て支援センターで実施している子どもショートステイの制度について、利用は昨年を上回る利用件数と報告されており、やはり時代のニーズとともにショートステイの利用が増えていることを実感している。

一方で、協力家庭さんという、地域の中で御登録いただいた御家庭でお預かりをするほうの利用は、残念ながら今年度はゼロ件だった。主にこちらができた背景には、小学生まで利用拡大したいという区民からの要望があり、利用に備えた体制をつくってきたが、まだまだ小学生が利用できることが認知されていないのが現状ではないかと思っている。来年度は、小学生も利用できるということを教育委員会の方々も含めた制度周知に御協力いただければと思う。

もう1点は、先ほどの冊子の131ページに、子どもの笑顔があふれるまちづくりということで、新規事業として子育てバリアフリーの推進と書かれていた。区有施設におけるバリアフリーと書かれていて、私立とか民間の施設などはホームページの情報に載らないのかという心配がある。利用する皆さんには区立も私立も関係ないと思うので、ぜひ私立の施設も、授乳可能なスペース、おむつ交換ができるスペースがあるので、情報として載せていただければと思う。

会長

それはぜひ、区民から見たら本当に利用できる所がたくさんあることがいい、それからその情報があることがいい。何か事務局のほうから。

事務局

今後ホームページに載せていく時には、配慮をさせていただきたいと思う。

会長

ぜひ皆さんから可能な限り情報をいただきながら、プラスしていきたいと思うので、よろしく願います。

ほかにはいかがか。

委員

私は部会の時も、文字数を大きくだとか、結構細かいことを申し上げてきて、取り入れていただいた思い、改めて御礼申し上げたいと思う。文字の書体も、明朝とゴシックをうまく使われたり、字のポイント数とか色使い、色刷りで非常に見やすくなっている。一般区民の方は有償ということだけれども、できれば多くの方に、26年度を見通した支援計画であるので、うまく渡っていける方法があればと思っている。

以上、最後のほうがよかったかなと思ったが、余り皆さんからお褒めの言葉が出ないようなので。

会長

やっぱり褒めていただくのは励みにもなる、本当にありがとう。この支援計画を区民みんなのものにしていけたらと思うので、これからもよろしく願います。

ほかには何か。

委員

育成会の新年会の時にお聞きしたが、牛込警察署管内の昨年度の少年犯罪がすごく少なかったということを知り、大変ありがとうございます。この場をかりて御礼申し上げたいと思う。

牛込警察署長代理

牛込警察署管内の少年事件だが、昨年は逮捕事案が1件で、その他、特に少年非行団体や非行グループによる集団的な犯罪等はなかった。その状況を説明させていただいたと思う。よろしく願います。

会長

新宿区が子育てしやすい町ということで、先ほど先生方にも大変褒めていただいた。知っていただいている方には、新宿は例えば非常に落ち着いた、それから地域の方々の支援者の多い町であると見られている。これが余り新宿の中身を知らない方のイメージは、歌舞伎町があるから、あの町では絶対子育てしたくない、危険な町というようなイメージもまだまだある。私はそれを多くの方に、新宿の町というのは支援者の多い、子どもたちも生き生き、伸び伸びしている町なのだとすることを、皆さんからも発信していただきたいと思う。

私どもの自治創造研究所というところで、地域のみんなで町を担うという仕組みについて研究していただいた先生がいらっしゃる。その方は自分の地元でプレイパークの活動もやっていると。ところが、新宿でいろいろな聞き取りを行ってみたら、自分たちのところはもう

携帯で、プレイパークで手伝ってくれる人がいない、今日出られないか、今日出られないかとメールがたくさん回ってくると。それはどこも同じであろうと思って聞いてみたら、いや、そんなことはない。現場に行ってみたらたくさんの、子どもの数と同じくらいの支援者がいたと。新宿というのはすごいところだと、イメージと全く違うと言われた。

これは一つの例だが、新宿は犯罪も多いだろう、それから町もきれいではないだろうとか、そういった片方のイメージもある。子どもたちが育っていく町、先ほど生涯発達の観点から言えば、老年期に至ってもしなやかに、したたかに、本当に充実した人生を送れる町である、そういった町を皆さんとともに目指したいと思っているので、よろしくお願いします。

副会長

区長によいしょするわけではないが、最近、私の教え子が結婚して、かつて東大和のほうに住んでいたが、妊娠するという事態になり、あえて新宿に引っ越してきた。それを聞いたら、彼女いわく、新宿はすごく子育てに対して充実している町だと聞いたからと言っていた。一つの事例だが、そういう人も現実にいる。

委員

新宿のイメージで、プレイパークのこともそうだし、いろいろな公園等も含めて、子どもが自然とかかわり、直接体験ができるという、このあたりをもう少し強く出していくことが大事ではないかと思う。都市部で、その条件を変えることはできない。しかし、都内の他の所と比べて自然が残されている。それが子どもの育ちにとって生かされる環境になっているかが、大きな問題だと思う。新宿は努力を重ねているので、そのイメージが強く浸透するようをお願いしたいと思う。

会長

プレイパークの活動は、この5年くらいの間で大きく発展をした。新宿に自然や緑がないかといったら、そうではなく、江戸の町の発達の中で大名屋敷の跡は大きな公園になっている。かつ、新宿の地形は、武蔵野台地の東の端に位置し、水辺も妙正寺川、神田川、外堀というような、見てみると、水辺とそれにつながる神宮外苑、御苑、それから落合の斜面緑地、それから戸山公園のような、それから早稲田大学等のあたりも緑地が残っている。

実は区民の活動の拠点として、新宿区は10地域の地域センターをつくってき。この2月27日に最後の地域センターである戸塚地域センターがオープンした。戸塚地域センターの最大の特徴は神田川に隣接しているということ。神田川に降りられるようになっている。戸塚地域センターをつくった所は、もともと公園だったところだが、公園としてなかなか機能して

いなかった。活用をするに際して河川公園構想というのをづくり、今、神田川は鮎も戻ってきている。清流に住む鮎も、毎年生息調査をやって、戻ってきているということで、今、神田川には二十数種類の魚が確認されている。

今度、戸塚地域センターに一度行ってみていただけたらと思うが、ロビーに入っていると、岩場も含めると5メートル、水の部分で3メートルの大型水槽に鮎と8種類の、ドジョウから、ハゼの種類、ウキゴリとかそういったものがある。

神田川というのは大雨が降ったときには、洪水を起こさないために、樋のような川にして、深く掘って、水を早くに東京湾に水を運ぶというような、そういった恐ろしい場面もある。神田川に降りられるようになっているが、これからの課題は、そういったことも含んだ上で水辺に親しんでもらう。だから、サイレンが鳴ったり注意報が出たら、水から必ず上がってもらうというようなことをこれから学びながら下に降りてもらえるような、かつ何かあったときの投げ輪をどうするとかもやりながら降りられるようにしたいと思っているんですが、やっぱり管理する側から見ると怖い。だから皆さん、そのためには皆さん自身や子どもたち自身が、学んで責任を持てる主体になっていかないと、いつまでも管理する側が開放しないので、そういったところもやっていきたいと思っている。確かに自然があるということを発信できるように、プレイパークの発信もぜひこれからもしていきたいと思う。

委員

プレイパークに、かかわらせていただいている。本当に戸山が頑張って8年やってきて、その後、継続して四谷も少しずつ、公園を利用してお母さんたちだけで頑張ってきた。お母さんたちの時間だけでは、毎週継続していくのは物すごく大変だった。フリーマーケットをやったり、寄附を募集したり、児童館のイベントとタイアップしたりということで、本当に小さいお子さんを持っているお母さん方がどんなに苦労してきた。もうだめかしらといったところに、ちょうど新宿区さんのほうからお声がけがあった。

また公園を使ってプレイパークをするというのは物すごく課題も大きくて、近隣からのクレームだったり、火を使いたいところでの公園課の許可、これをそれぞれ対応していると大変だったが、新宿区のバックアップ体制が本当にすばらしくて、横の連携をとっていただき、公園課と子どもサービス課と一緒に話し合いができる場も設けていただいた。そういった支援をいただけたおかげで、小さな活動がどんどん大きくなっていった。そして今、安定した活動につながり、さらに落合のほうに広がっていった。やはりやる気のあるお母さんたちが支援していただけたことで、さらにパワーアップできたことがすばらしいと思っている。今

後ともそういう、小さい活動だけど頑張っているところに手を差し伸べていただけると、やる気がパワーアップし、うまくいくと感じている。

委員

戸塚地区の地域センターというのは10番目にできた関係で、会長も相当骨折りいただき、神田川の河川公園に付随してでき上がったような地域センターである。神田川を守る会というものが戸塚第三小学校を中心にしてあるが、実際に神田川がこんなにきれいになったのだろうかというふうに来る方々はみんな驚いている。特に新宿は汚れた町というイメージが随分一時は多かったものだから、そういう意味では、今回の区長の御支援、御協力いただいたということ、改めてこの場をおかりして感謝を申し上げる。

会長

それでは皆さん、本当に年度末のお忙しい中を御出席いただき、ありがとうございます。

22年度第1回目、次回の協議会は7月ごろを予定している。第三期の委員の任期は平成23年6月までとなっているので、皆様方、どうか引き続きよろしくお願ひ申し上げます。

それでは、本日はこれをもって21年度第4回の次世代育成協議会を終了する。

午前11時50分閉会